

なんと未来ミーティング<移住者コース>開催記録

開催日時■令和3年9月15日(水)19時30分～21時30分

開催場所■南砺市役所401会議室(メイン)・参加者自宅・402 会議室・302 会議室

参加人員■<参加者>12名

<メインファシリテーター・司会>なんと未来支援センター

<市側>田中市長、川森総合政策部長、上野情報政策課長、櫻井情報政策課主幹

船藤南砺で暮らしません課長(zoom参加)、金子定住・空き家対策係長(zoom参加)

広報係2名

<グループ・書記>市職員3名(情報統計係2名、定住・空き家係1名)

<オンライン運営>なんと未来支援センター 2名

<傍聴>北日本新聞社、富山新聞

Facebook なんとくんによる配信視聴者(配信期間9/17～9/30)

※当日機器接続トラブルによりオンライン配信中止

テーマ■ well-being ～真の豊かさとは～(メインテーマ)

Aグループ『空き家の活用』

Bグループ『仕事と働き方(アフターコロナ)』

Cグループ『暮らしと生活(教育、イベント、祭り等)』

スケジュール■

19:30 開会

昨年の提言による市の取り組み報告

19:35 市長あいさつ

南砺市の課題と取り組みについて(プレゼンテーション) 市長

20:05 グループワーク1 (テーマを基に課題や意見を出し合う)

20:30 ワーク1 グループ発表・市長コメント

20:45 グループワーク2 (課題整理・選択し結論をまとめる)

21:05 ワーク2 グループ発表・市長コメント

21:30 閉会・解散

市長プレゼンテーション■

新たなまちづくりのキーワードとして、～真の豊かさとは～
この言葉をヒントに南砺市をwell-beingのまちにしたい。

(well-beingとは、最終的に幸せで肉体的・精神的・社会的すべてにおいて満たされた状態をという)

南砺市は SDGs 未来都市としてゴールの一つである「すべてのみなさんが健康な福祉」に向かって、この地にお住まいになる



皆さんが幸せになって欲しい事を大前提とし、課題はあるにしろ、“田舎だから・地方だから”こそ出来る本当の豊かさを発信しながら、この地に住んでいただき、ビジネスもしていただく事を想定している。

全国的にも人口減少・少子高齢化は一番の問題ではあるが、南砺の強みを活かしながら「一流の田舎」を目指し、まちづくりを進めている。中でも小規模多機能自治という新しい住民自治のあり方として、地域の課題は地域で解決し、それを支援する仕組みを再構築し、更なる連携強化に取り組んでいる。また、子ども達に焦点を合わせ教育環境の充実や、働き方として首都圏から地方への整備、コロナ禍で必要な支援など新たな取り組みと今後のまちづくりの方向を示唆し、行政だけでなく市民の皆様と一緒に取り組む事が、これからの未来が開けていくと話した。

グループワークの内容■

今回の参加者は、結婚・仕事を機に移住された他に、自らが住みたい環境を探して移住された方も参加いただいた。今、気になるテーマを基に事前アンケートによりグループ分けし、各テーマの問題や課題を出し合い、より住みやすく、そして住みたくなる南砺市にする意見やアイデアを市長に発表した。メインファシリテーターをなんと未来支援センターにお手伝いいただき、途中接続トラブルもあったが、グループ内は終始和やかに、時には盛り上がっているのを遮る惜しさも感じました。また、参加者の緊張をほぐしワークに入りやすいように、チーム名を作ってからスタートとなった。

(Aグループ:なんと家えーい！ ・Bグループ:めがね ・Cグループ:タコヤキ)

発表内容と市長見解■

Aグループ『空き家の活用』

- チーム名:なんと家えーい ●南砺市の空き家に住みたい人の分析(リサーチ)を行う！
●移住者サイドに立った優しいサイトであるべき

発表内容:

空き家の活用までのアプローチが課題って事で、空き家の活用してもらうまでの2つの点で考えました。1つ目が分析。2つ目は肝とも言える情報発信媒体の内容強化です。

まず、1つ目の分析については、空き家は平成28年度時点で1000件以上あり、効果的・効率的に空き家を活用してもらうには分析が必要である。具体的にいうと、①買っている人の特性(年代、元々どこに住んでいたのか等)②買った目的(住むために買ったのか？事業の為に買ったのか？)③買われた空き家の場所 この3つを分析するのが必要だと考える。空き家は沢山あるので集中的・効果的に空き家を、言葉は悪いが処理とか活用してもらう為に、分析をすることによって、例えば年代を分析して20～30歳世代の子育て世代の人が多く買っているようであれば、大きな家を必要としていなくて、小規模の空き家とか学校とかに近い市街地の空き家を中心的にアピールするようなPRができると思う。また逆に事業とかで買っている傾向があれば、比較的大きな家に特化してPRしていこうなど、効果的なPRができる。

2つ目の情報発信媒体の内容強化については、今現在も移住者用のサイトとして「なななんと」があるのですが、このサイトでも十分ですが、更にアプリがあってもいいと思う。サイトやアプリでいわゆるプッシュ機能、個人の嗜好にあったプッシュ機能が出来るように、個人情報サイトをアプリに登録してもらうフォーマット作ってもらい、登録内容に合ったその人の個性とか趣味にあった空き家情報をしっかり発信するヒモをつけたらどうかという意見があった。また南砺市ならではの特徴的な、あずまだちとか、伝統的家屋の空き家情報をピンポイントで通知したり、

子育て世代やアパートから一軒家に住もうとしている人に対しては、個人にあった情報をしっかり発信していくことが大事である。それに加えて、現在サイトにある情報量が足りていない。「なななんと」には、空き家の売買情報しなくて、他にも必要な情報があるのではないかと。例えば、移住する人にとっては、南砺市は広いので、土地勘がないからイメージつかない為、空き家に付随してグーグルマップの地図をのっけたり、ストリートビューをつけたりする必要があると思う。また住めるまでに、いくらかかるのか？(安く買っても結局改修とかで高つく)また、空き家周辺の求人情報や学校まで何分、最寄り駅まで何分、最寄りスーパーまで何分？といった日常的に使う情報もあわせて発信して欲しい。最後にリノベーションスクールとかを通じて、空き家に対する、また活用にするきっかけを作ったり、シェアハウスから一軒家に住む流れもある為、シェアハウスの整備もしながら、そこに住まれた方に空き家の活用を段階的に促すような通知があれば良いという意見がありました。

市長答弁内容:

分析と情報発信は大事である。まず、空き家を買って住んでいる人は南砺で結構増えてきたので、そういう人達がどうやったかって言う分析。いくらかかったのか？悩みがあったときに誰に相談してどうしたのか？そういう情報が一つになれば、そこに見にいけば、あの人に聞いてみよう、この人に聞いてみようっていうカタチにまずはなれば良いなと感じました。

我々、おせっかいの移住者応援団とタイアップしながら一緒にやっていますが、何が出来るかを考えて行きたいと思います。空き家バンクは不動産屋を通さないと掲載できない為、ストレートでこんなにいい空き家があるけど、ご本人の気持ちと不動産屋のなかで、物件として扱えるかどうかという事で一つの何かがある。

また、その手前に僕らが悩んでいる事は、南砺の空き家の人はもともと売りにたくない、貸したくないと思っている。それは仏壇とお墓は残したいと。徐々にそこまで言ってもどうしようもないなってところまできているので、わりと古くなってしょうがなくなって空き家になっている所が多くなって悩んでいる。市としては、家具の後始末もできる助成制度を説明しながらまわっている。空き家は生ものなので、前の人がいなくなったらすぐに入るのが一番よい。新鮮な方がよいので、そういう所をどうやって作っていくかを同時考えていかなければならない。

後、どう使うかをちゃんと頭の中で考えている方は、割とアドバイスしやすい。

今聞いた事を実現に向け、すぐに高いアプリは造れないので、まずはコミュニティの枠を作って、そこでみんなで書き込みながらいろいろ考えられるかもしれないので考えてみたいと思う。

Bグループ『仕事と働き方(アフターコロナ)』

- チーム名:めがね ●多様な働き方と情報発信
●スポット的な人材派遣制度

発表内容:

仕事をしたい人と、人を雇いたい人の両方の立場でどんな課題があるかをあげた。雇い側にすれば忙しい時には欲しいけど、仕事のない時期もあるし、通年雇用だとハードルが高いという意見がある。また、働きたい人に関しては、フリーランスで仕事している人は収入が年間の半分は自分のやりたことで、半分は勤めてお金がもらえたらという希望とかある。せっかく移住したから、その地域のある農業とか、昔からあるような仕事をつまみ食いきたりすることで、人との繋がりもどんどん広がり、ニーズがあるなって意見がでました。



今実際に事例として、農林水産省の特定地域づくり事業協同組合という制度がある。マルチワークで、期間的にこの時期はこの仕事をして、この時期はこの仕事ってことでいろんな物をつまみぐいしながら年間雇用があったらという意見が出ました。一次産業だけではなく、例えばお店で働いたりとか、南砺市では伝統工芸が盛んなのでそういったものが仕事に結びついたらいいなと意見もありました。

また、今あるネットサービスである「ココナラ」っていう特技を売りたい・買ったというサービスとか「クラウドワークス」みたいなWEBサービスとか見ると、移住者とか人のスキルに対して、対価としてお金が与えられるので、なんか頼まれてボランティアでやっちゃったというよりも、しっかりお金も貰えて、自分の特技も知ってもらえるという働き方が出来るんじゃないかという意見もありました。

ちょっと話はズレるが、そうやって働きと雇いのハードルを下げれば、例えば高齢者の人とかが雪かき手伝って欲しい、草刈り手伝ってとかの福祉支援とかにもつながるんじゃないかと思う。また単価を下げつつ、頼みやすいみたいなカッチリすぎない雇用形態のシステムがあってもいいんじゃないかという意見が出ました。

市長答弁内容：

これは絶対やってもらいたいというのが、特定地域づくり事業共同組合というのを2~3カ所手をあげたが、問題があってできなかった。利賀村でも手をあげた。城端か福光でも手をあげたが、制度的にどこかに所属しなくてはいけなく、条件が難しく出来なかった。

この制度は総務省だったと思うが、全国でも非常にいい制度でみんなのニーズをくみ取って最高の制度と出したが、実際に手をあげてやる人が少なく、去年の予算も相当あまっている。再度やってくれやってくれときていて、制度上の問題があると思っている。その手をあげられない所のハードルを下げてくるかを、ちょっとやり取りしながらいる。本当に南砺市でやりたいと思っているところが具体的には2カ所聞いているが3~4カ所はあると思う。そういうものができれば、今皆さんの言ったマッチングや、季節に合わせてできる仕事がいいなと思うし、分かりやすくやりたいなと思った。

後、みんなで考えてもらいたい。アプリでどんな事が出来るかわからないが、僕の知り合いが、“能力ある人はみんな#（ハッシュタグ）”をつけようという事業をやろうと。例えば、写真得意です。#写真、#草刈り、#屋根雪おろし等、自分の能力を#で整理しようと言った人がいた。#が良いかはわからないが、なんか人材バンクのようなゆるい、何が得意なのかを発見できるアプリみたいなものがあればいいなと思っていた。また、デザインとかマーケティングとか今ちょうど未来ワークス事業で、都会の人が副業として、やり取りしながらお手伝いいただきお金も発生している事業です。具体的に南砺市も企業も相当やっています。今後の事業転換やアドバイスを受けながら全国なものとローカルのものがあれば良いと思う。更にローカル中のローカルも必要とおもうので、このアイデアを職場でなげかけてみたいと思います。



Cグループ『暮らしと生活(教育、イベント、祭り等)』

- チーム名：タコヤキ ●イベント開催における市独自の指針が欲しい
●参加しやすい地域の意識改革と情報発信の強化

発表内容:

コロナ禍において、イベントに関して明確な基準が欲しいというところで、具体的にどのコミュニティでやっていけないのか、どのよう規模でやっていけないのか、抽象的などところがある。コロナ禍に限らず小矢部市・射水市でやって、南砺市ではやっているが逆にやっていないという風に、市民側からすると公平・不公平感を感じる為、明確な指針を示していただきたい事が1点。

それともう1点、移住して知り合がいるはずなのに神事に参加すると、意外と地元にいる人達が参加していなかったりする事がある。県外に移住して、イベントに参加していなかったり、地元にはいるけれども神事に関しては参加していなかったりという知り合いがおり意外と根付いていない。この2点の課題に対しアイデアを出し合いました。

明確な指針と、地元の人に参加という事で、地元で育ったから、地元を盛り上げよう人達がより増えるようなイベント、又はコミュニティの作成を強化することが良いのではないかと意見が出ました。今、SNSとか市長もはじめブログ等を活用されている所も含めて情報発信していければ、若い人達の地域に根付くところが強化されるのではないかとアイデアがまとまりました。

市長答弁内容:

イベントとか祭りに関しての指針・ガイドラインはあります。

例えば分かりにくいところは、獅子舞どうする？何人の獅子ならダメなのか？とか、2人ならいいってところはない。これはまさに、地域の皆さんが判断すべきこと。今回感じたり、聞いたりした中で、曳山祭りや夜高祭りとか一般の観光客が入らない仕組みが出来るかどうかがある。これが出来ない場合はどうしますか？もし知っている人だけでお祭りをしましようという選択でできて、なおかつ誰かが来たらどうしよう？とかその地域の中で、今年心配だねって事でやめられたってことを耳に入っています。何を言いたいかという、ガイドラインは一応あるけれど、お祭りはガイドラインにあてはまらない部分がある。その辺は実行委員会の方で練ってもらっています。地域のお祭りの、中心的な人に練ってもらっているが、このあたりで難しいがゆえに南砺の場合は中止が多かったと思う。ただ五箇山では今年からは結構復活し、まさに地域の人だけでやれば大丈夫。私の集落の獅子舞はよそから来た人に、手伝ってもらわないと難しい為2年止めました。そのあたりがガイドラインのファジーなどところがある。

ただ、地域の祭りは地域で決めてもらう事が大事だし、普通のイベントであれば実行委員会がどこにあるかで決めてもらうことが大事ですが、色々と市に相談があるのでガイドラインをこうゆう事ができます、こうゆう事が出来れば大丈夫ですよという事を明確にしていくことが今後、大事だと感じました。

あと若い人が出ていく事が非常に問題である。今、南砺市では18歳から20歳ぐらいまでの子が一気に出て行って、普通なら何人か戻るのが、ゼロまで戻らないという社会減がそのまま減になっている問題がある。大学に行って就職して戻らない、就職で戻らない人がいます。根本的にはやっぱり自己肯定感っていうか、私はここ住んでいて住みたいと思うまでのプロセスが希薄であったと思う。

先程、ジェンダーギャップ解消で、お嫁にきて地域の公民館でお茶くみとお酒注ぎだけをやらされて、そうゆう子の娘が育ったら、私はこうゆうと所は嫌だと言って、実際に娘を外に出した方がいいと言っているお母さん方も何人もみている。社会全体でそうゆう事を考えることは当然でだと思ふ。地域でジェンダーギャップを考える、地域で、



もっと細かい言葉で、みんなで考えられるような社会をつくらなければならない。ただジェネレーションギャップで相当上の方は動かないので、まさに若い人たちがそういう事を醸成していかなければならない事が一つと、ふるさと教育とかやっていますがまだまだぬるくて、今高校生に何でもやりましょう！と、今まで小中学生に意見を聴いていたが、それに対して大人がちゃんと向き合って“一緒にやろうよ”“一緒に頑張ろうね”って事ができなかったの、少しずつ若い子供の頃からふるさとについて考えて行く場をこれから作っていくことが大事である。ただし、今の若い人たち皆さんも含め、相当南砺のそれぞれのふるさとの事を、昔の人よりも完全に何とかしなければ！帰りたい！とかいろんな事を思っています。帰りたい人がちゃんと帰れる仕組みを行政でつくっていくことが大事だと思う。

閉会・解散■